

日本海学遊友セミナー塾 2009年 報告書

(1) 事業の目的

1. 日本海地域の「森・里・海」の地球環境保護（海）
2. 命の尊厳を五感で考察（心の和）（ものづくり～命を守る）
3. 日本海地域&日本海諸国との環境保護交流（福祉）

(2) 実施内容

	日時	場所	内容	発表者	受講者
1	2009年9月19日（土） 13:00～16:00	サテライト・オフィス地域交流センター	ものづくり五感研究ワークショップ	松本剛明・川上光晴・沖野麻里子	農業漁業就業者・学生・栄養士
2	2009年9月19日（土） 18:30～21:00	日本文化交流センター	福祉研究ネットワーク作り	堀川薫・鎧高由紀子・沖野麻里子	福祉に関心あるメンバー
3	2009年10月2日（金） 13:00～16:00	サテライト・オフィス地域交流センター	日本海の自然環境の勉強会	太田正博・中村亘	一般・学生
4	2009年11月26日（土） 18:30～21:30	日本文化交流センター	日本海の自然環境の勉強会	稲村修・八田正道	一般・学生
5	2009年12月13日（日） 13:30～17:00	サテライト・オフィス地域交流センター	ものづくり五感研究ワークショップ	松本剛明・川上光晴・桑原志音	農業漁業就業者・学生・栄養士
6	2009年12月19日（土） 15:30～16:30	サテライト・オフィス地域交流センター	ものづくり五感研究ワークショップ	松本剛明・中山妙子・中井敏夫	農業漁業就業者・学生・栄養士
7	2009年12月19日（土） 15:30～16:30 18:30～21:00	日本文化交流センター	福祉研究ネットワーク作り	堀川薫・中井敏夫・川上光晴	福祉に関心あるメンバー
8	2010年2月20日（土） 13:00～16:30	サテライト・オフィス地域交流センター	日本海の自然環境の勉強会	北野孝一・柴田時和・帯刀毅・中川忠昭	一般・学生
9	2010年2月20日（土） 18:30～21:00	日本文化交流センター	福祉研究ネットワーク作り	帯刀毅・堀川薫・大井進	福祉に関心あるメンバー
10	2010年3月20日（土） 8:00～11:00	養護学校	自然環境の美化作業ボランティア	松原隆光・中山妙子・徳島達也	一般・学生

(3) 内容の詳細

(ア) 日本海の自然環境の勉強会・・・日本海地域の「森・里・海」の地球環境保護(海)
富山湾の環境を研究するメンバーが集まり、今回は富山湾について勉強をした。
もっと、小中学生にも理解を求める活動を拡大したいという意見が多かった。

(イ) ものづくり五感研究ワークショップ・・・命の尊厳を五感で考察(心の和)(ものづくり
～命を守る)

- ・観る,聴く,嗅ぐ,食,話すの五感の実践企画
富山平野の水と地産地消の実践
若者と高齢者に可能な有機農業の未来の体験
日本海沿岸の流通開拓と重要供給の関係の討論会
ハーブの研究と活かし方のワークショップと配布
農業漁業の従事者と五感セラピーの必要の討論会
を関連させた中では、農業ハーブが最も成果が表れた。

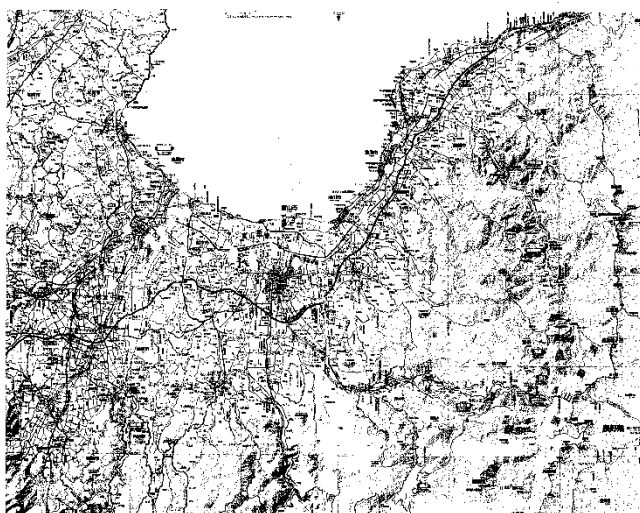
(ウ) 福祉研究ネットワークづくり・・・日本海地域&日本海諸国との環境保護交流(福祉)
今回は以下の3点のみ実施できた。

- 福祉ネットのはじめに県内の施設場所マップの作成
富山型サービス：まだ労働意欲ある高齢者の事業施設の目標研究
市長村別割合

実際に福祉に関わりのある方々がリーダーだったので、現実的な未来像を描くことができ
成果が表れた。

(4) 発表のまとめ報告

3部門の代表者のレポート掲載



その1 「日本海の自然環境の勉強会」から

富山のさかなたち - 環境「森・里・海」と魚たちの共生 -

講師 稲村 修

富山の海辺に立つと、眼前には富山湾が広がっている。そこには、我々、富山県民が誇りとする「富山湾のさかなたち（生物学的には魚類でない水生生物も含む）」が棲んでいる。富山湾は本州の日本海側中央部に位置し、岸近くから急激に落ち込んで水深 1000m を越す深海湾となっていることから、日本海と同様の水塊構造を持っている。つまり、赤道付近に源を有する黒潮から分流した対馬暖流が表層を流れ、日本海の対岸にあるロシア沿岸で沈み込んだ深層水（日本海固有水）が深海に横たわっている。

さらに富山県の特徴として、標高 3000m 級の北アルプス立山連峰を背後にもち、日本海で蒸発した水が雨や雪となって富山に降り注いで、多くの河川が山々から平野部まで刻まれている。このように、僅か数十 km の水平距離に 4000m もの高低差を持つ地域は世界でも希である。このように富山の多様な環境と、富山湾につながっている日本海が育てている「富山のさかなたち」を紹介する。

1) 富山湾の環境

日本海に面した富山湾は日本三大深湾の一つで、最大水深が約 1250m もある。大陸棚があまり発達せず、特に県東部の沿岸では岸近くから急激に落ち込む海底地形をしている。富山湾の水塊構造は日本海の縮図ともいえ、その表層部には黒潮から分流した対馬暖流水が流れ込み、その下層部には水深 300m 付近を境として水温 2 以下という冷たい日本海固有水（富山湾の深層水と呼ばれる）が存在する。つまり、鉛直的にみると海水温が急激に変化する躍層で隔てられた層状構造になっており、このような海洋環境は、そこに生息する生物に強く影響し、独自の生態系を形成している。

また富山湾には、背後にある立山連峰などの山々から、多くの河川が流れ込んでいる。県西部では比較的流れが緩やかな河川があり、下流部では勾配の緩い平野部が広がっているが、県東部では高山域から海域までの勾配が急で、一般的に言われる流れの緩いか流域は発達せず、急流のまま海に注いでいる。さらに、地下へ伏流した水は海底湧水となって、富山湾東部の海底から湧き出している。このように富山湾には大量の陸水が流れ込んでいる。これらの陸水は、山や里から出た栄養塩の運搬役をになっており、沿岸海域から沖合までの広い範囲で陸水の影響を強く受けている。

このような富山の陸域や富山湾の多様な水環境が、富山の豊富で多様な「さかなたち」が棲んでいる理由といえる。

2) 富山県のさかな

日本各地のほとんどの府県で、「県の魚」とか、それに類するものを決めている。県によって

1 種類のところもあれば、たくさん選んでいる県もある。本県では「富山県のさかな」として、1996 年（平成 8 年）10 月に 3 種類を選定した。選定にあたり、富山県のイメージにあう、歴史的・文化的に県民に馴染みが深く親しまれている、相当の漁獲量がある、知名度が高い（富山県特有のさかなである）などの条件を勘案して、ブリ、ホタルイカ、シロエビを選んだ。それぞれを「富山湾の王者ブリ」「富山湾の神秘ホタルイカ」「富山湾の宝石シロエビ」と呼んでいる。ブリは日本海を九州から北海道沿岸まで広く回遊して成長し、ホタルイカは日本海側沿岸域で産卵するものの、成長は日本海の中央部と推測されている。つまり、ブリやホタルイカは「富山のさかな」ではあるが、広く日本海の恵みともいえる。一方、シロエビは富山湾の水深 200～300m 付近を中心に生息し、富山湾のみで漁獲される「オンリー 1」である。

3) 表層から深海へ

富山湾のさかなを表層の対馬暖流域から、深海の深層水にすむ生物まで紹介する。

表層には、空飛ぶトビウオを初めとして、イワシ類、アジ、サヨリ、サバ、クロマグロなど、所謂「背の青い魚」が多く生息している。これらは日本近海のほぼ全域で見られ、太平洋側では黒潮、日本海側では対馬海流という同系の暖流が流れ込んでいるからである。表層から深海に向かうと、ホッケやマダラなど、冷水に適応した魚たちが見られる。そして、水深 300m 付近からは日本海固有水の世界となる。シロゲンゲ（標準和名ノロゲンゲ）やクロゲンゲ、そして魚津では「ナンダ」と呼ばれるタナカゲンゲがすむ。また、アマエビ（標準和名ホッコクアカエビ）やベニズワイガニ、そして深海性のバイ類（ツバイ・カガバイ・オオエッチュウバイ・エゾボラモドキ）など、ほとんどは、水温が 5～6 を越してしまうと生きていけない極寒の海にすむ生物たちである。

4) 富山の地形と淡水魚

富山県は県東部と県西部で、地形が著しく異なる。その影響で、河川などの水圏状況も対照的である。県東部では立山連峰から急勾配の河川が流れ落ち、一般の河川で見られる流れの緩やかな「下流域」はない。いわゆる中流域のまま、富山湾に注ぎ込んでいる。一方、神通川を境に、県西部には平野部が広がっており、緩やかな流れや止水域を好むコイ科魚類も多く見られる。

富山の代表的な淡水魚として、黒部川源流域「雲の平」付近の標高 2500m あたりでも見られるニッコウイワナは、日本の魚類では最も標高の高いところにすむ魚といえる。それが、春先の県東部河川では海の見える下流域でも見られ、その急流ぶりを示している。氷見市に棲むイタセンパラは日本固有種で、国指定の天然記念物になっている。イタセンパラの保全には、産卵母貝となる淡水二枚貝や、二枚貝の幼生が寄生する底生魚類の保護も必要で、イタセンパラを保全するためには、その生息環境や生態系全体を守らなくてはならない。

5) おわりに

多種多様な「富山のさかなたち」は、標高 3000m の立山連峰から水深 1000m 超の富山湾が生み出す富山の多様な地形や環境に起因する。この生物多様性を維持するためには、富山の環境を保全することが重要で、その活動を広げていくことが、人類の地球上での生息環境を守ることに

も通じると信じている。



その2 「ものづくり五感研究ワークショップ」から

「農業に携わる人生」

講師 松本 剛明

1. 農園の紹介

紅ほっぺイチゴ。島オクラ。ミニトマト。白ナス。トウモロコシ。ジャガイモ。
既存の規格に合わないため市場流通しないが、美味しい、栄養価が高い、てごろなサイズ、見た目が面白いなどの個性的な野菜がたくさんある。経営的には、リスクあるけど、そうした野菜を生産したいと思った。個性的な野菜なので、市場には出荷せずに、ホテルやスーパーとの直接契約、直売所やお客さんに直接販売するという形態をとっている。

2. 農業を通じた福祉活動の紹介

農業を通して、障害者の方々が社会で活躍できる機会をつくり、農業を純粋に楽しんで

健康支援のサポートと活動を実践。

(POP・シール作り 障がい者の農業体験 精神障害者のアルバイト)

3. 農業を通して学んだ成果

(1) 農薬について

食の安心安全について

無農薬栽培の経営的リスク

農薬に求められる安全性の基準について

農薬のメリット。

農薬に関する課題について

農家の農薬を減らす知恵

(2) 農業の可能性について

食を生産するだけでなく、教育・福祉・癒し・遊びを充実させる可能性

園芸療法、市民農園、グリーンツーリズム

環境や景観の保全

(3) 野菜を栽培する名人に共通するもの

野菜本位で考えて動くか、自分本位で考えて動くか。

当たり前のことを積み重ねる

4. 今後の取り組み 21～22 世紀の課題の考察

(1) 高齢者や定年退職者に農業支援

本格的プロ農家を目指すもよし、家庭菜園をするもよし、農業者の作業の手伝いをするもよし、様々な形で農業に携わってくださる方々が増加してほしい。耕作放棄地の問題、農業生産力の強化、農作業手伝い、多様化する食のニーズへの対応などと言った専門的な問題だけでなく、健康促進や生きがいづくりを目指し、社会生活に貢献するメリットがある。

(2) 農業入門セミナーなどを開催

未就業の若者、フリーター、高齢者に至るまで幅広い層に実施めざす。

農業に取り組みたい、農業のお手伝いをしてみたいという方を対象に募集する。

すなわち世代間を越えた交流や勉強会にし、農業を通しての交流、地元の食材を使用して、伝統的な料理や漬物などを若者が高齢者の方々から学ぶ機会をつくる。中でも学生や若者と農業者の交流について、農業の魅力を知っていただき、農業を志す人が一人でも増える活動を展開する。

移住体験型のセミナーとして市民協働で産学官の連携をはかる。

短期の居住プラン農業体験。(他の市町村や他の県からの参加を募集)

国際交流イベントの企画を実施(在住の外国人にも農業の指導と食文化の交流をめざす。お国の自慢料理、ふるさと料理)

地域再生フォーラムを身近な場所で定期的を開催する。

寺や公民館の活用（市民の自治をあ復活しよう）

日本海の魚と里山の幸をコラボレーションし、地域の振興活性化めざす。
日本海沿岸の海里山の幸マップをコメント入り作成し（韓国後、中国語、英語）翻訳した案内版を道の駅、海の駅に常設する。



その3 「福祉研究ネットワークづくり」から

「あゆみ」プロジェクトの紹介

講師 堀川 薫

平成 12 年 4 月からスタートした介護保険制度が高齢者介護を社会全体で支える仕組みとして定着している中、今後団塊の世代が順次高齢期を迎えることに伴い、高齢化に一層拍車がかかっていく現代社会を考察する。

高齢者の生活機能の低下を未然に防止し高齢者の能力発揮、生きがいづくりをモットーにしたい。富山県全体の動向では、平成 15 年度から各地域でケアネットチームが結成され当初 225 チームが現在では 2758 チームに拡大されている。しかし、65 歳以上のひとり暮らしの方が増加することに伴い、地域でのケアネットチームでの関りには限界があり、その地域に生活する高齢者自身も、安心して暮らせる生活を求めて施設等への入居も増えている。現代社会の状況に、しっかり対応できる豊かな機能性の施設の建設をめざす総合研究ネットチームが歩きはじめた報告である。

富山型サービス：小規模通所介護事業所目標はいかにあるべきか？

1. 選べる多目的プログラムの充実

（利用者本位の施設環境整備し個々の過ごし方を尊重する）

2. 安全で快適な施設環境

(医療情報の整備)

3. 職員の看護・介護能力の向上

4. 地域・家族と温かい交流プログラムの充実

(核家族増加のもと、共働き夫婦の子育て家庭を支援する)

集団的なプログラムだけでは利用者ひとりひとりのニーズに応えられないため、利用者が自らメニューを選択・継続して出来る活動を取り入れたい。

デイサービスは生活リハビリだけではなく自立支援に重点をおき高齢者が社会参加できる機会を提供するため、さまざまな機関と連携を持ち、生きがいのある老後の過ごし方にも注目した施設の建設が求められている。

高齢者の長年培ってきた能力を今後の社会の財産として残していくため、潜在能力の有効活用として高齢者が活躍できる分野を、自治体や民間会社とのつながりを持ち社会全体としてのサポート体制の豊かな研究の第一歩にしたい女性の社会進出を応援し、次世代育成支援をサポートしながら家族的保育・子育てを目指し子供が安心して過ごせる環境をつくる研究調査考察となった。また高齢者の子育ての経験を活かし、子供達が一緒に過ごすための空間としての富山型デイサービスの改良充実を考え、介護のみの施設でなく、生きがいが創造できる施設の建設をめざす仲間がアイデア考察&調査研究の実現に歩き出した。

